九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

一八五〇年代のドイツ労働運動「鎮静期」の問題（中）

小林，栄三郎

https://doi.org/10.15017/2334019

出版情報：史淵. 70, pp.1-18, 1956-10-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

一八五〇年代のドイツ労働運動「鎮静期」の問題（中）

小林栄三郎

五

現在、東ドイツで企画され、続々と刊行されている「ドイツ労働運動史のための文書的研究」の第一巻（一九五四年刊）に見ゆるクルト・ヴィルデンハインの報告「エルフルトにおける労働運動史の史料」は、一八五〇年代におこなわれた当局の取締りの徹底ぶりについて、つぎのように述べている。――一八四八年の諸事件のあとには、エルフルトでも十年以上の反動がつづいて、一切の反対派的運動は抑圧された。政府は、労働者階級に属するすべての者を政治的革命家ではないかと推測するので、こうしたひとびとには鋭い態度で臨んだ。エルフルトで一八四八年に設立された「労働者体操協会」（Arbeiter- Turnverein）は、一八五二年に解散しなければならなかつた。労働者団体のうちで存続を許されたのは、ただ、十八世紀からつづいているものもある手工業職人疾病金庫（Handwerks- Gesellen- Krankenkasse）だけであつた。特に遍歴する手工業職人（かれらはハントヴェルクスブルシェ Handwerksbursche と呼ばれていた）、とりわけ、革命的中心地として知られていたブレーメン市から来た連中（solche, die aus der als revolutionäre Zentrale bekannten Stadt Bremen kamen）が、鋭く監視された。かれらは国道や鉄道駅で、革命的文書をもつてはいないかと検査された。またかれらには、何かと口実さえつけば、遍歴継続のための警察査証が拒否された。こうした

事情をかえりみれば、エルフルトで一八六五年二月にようやくラッサール派の全ドイツ労働者同盟の支部が設立されたことも理解できる――と。[註16] これによつて、当局の警戒が主として手工業職人に向けられていたこと、「労働者体操協会」さえ解散させられて、わずかに職人疾病金庫だけが存続しえたことがわかる。

このヴィルデンハインの報告にも言及されているように、自由ハンザ都市ブレーメンは当時のドイツにおける革命的中心地として知られていたが、最近この市の国立文書館の史料を利用した研究叢書が発行され、その一つとして一八四八年の革命から一八九〇年の社会主義者法廃止までの同市における労働運動の詳細な研究書が出版された。ウルリッヒ・ベットヒャーの「ブレーメンにおける労働運動の端緒と発展」（一九五三年刊）がそれである。この市が革命的中心地となつたのは、当時の新興産業の一つとして多くの労働者を吸収した葉巻製造の隆盛によるところが多いと思われる。ベットヒャーは、「革命の諸年の労働運動は、ブレーメンではドイツの他地方におけると全く同様に、いかなる作用をも後におよぼさなかつた。実際には一八五二年いらい、もはやいかなる労働運動も存在しなかつた。(Die Arbeiterbewegung der Revolutionsjahre hatte in Bremen, genau so wie in anderen Teilen Deutschlands, keinerlei Nachwirkungen gezeigt. Praktisch gab es seit 1852 keine Arbeiterbewegung mehr.)一八五六年から翌年にわたる経済恐慌が一八六〇年代のはじめに克服されたのち始まつた産業的高揚の結果として、また、それとともにますます前景にあらわれてくる社会問題の結果として、はじめて労働運動はドイツに新たに発生してきた。(Erst im Gefolge der industriellen Aufschwungs, der nach der Überwindung der Wirtschaftskrise der Jahre 1856/1857, und der damit immer stärker in den Vordergrund tretenden sozialen Frage erstand die Arbeiterbewegung in Deutschland von neuem.)」と書いている。[註17] 総じてこの書は、おそらく同市が西ドイツに属している事情に由来すると思われるが、東ドイツ側の研究を全く利用していないように思われる。したがつてその視角も制約されているようで

あるが、原史料に直接あたることのできないわれわれとしては、ベットヒャーの記述によつて見てゆくほかはない。

ベットヒャーによると、ブレーメンの葉巻工業は一八四〇年代にめざましい発展をとげて、これに従事する労働者数も一八四二年の二、八三六人から、一八五〇年には六、三四八人(婦人および少年工を含む)に増加した。(註15)一八五〇年代初めのブレーメンには、多くの労働者団体が存在したが、一八五二年までにほとんど解散させられ、労働者教養協会「フォーアヴェルツ」(Vorwärts)だけが残つた。解散に応じなかつた三つの秘密結社すなわち「死者同盟」(トーテンブントTotenbund)、「指物職人の夜の集会」(Tischlergesellen-Abendunterhaltung)、「新友好会」(Neuer freundschaftlicher Verein)も一八五三年までには消滅した。

まず労働者教養協会「フォーアヴェルツ」について、ベットヒャーの述べるところを見よう。一八四六年に、商人J・D・コープ(Koop)および新聞編集者カール・アンドレー(Karl Andree)の提唱にもとづいて、十二人の葉巻労働者が労働者教養協会を結成することになり、十二月二十日に第一回集会を開催して一四四名があつまり、会の名称を「フォーアヴェルツ」(前進)とすることに決定した。会の目的は、「会員の道義的ならびに精神的教養を高め、友好的交際のうちに美しいものと高貴なものへの感覚をよびさまし、各人にその属する身分(Stand)の名誉を高める義務をおわせる」ことにあつた。翌一八四七年に、「この会の善良なる目的を促進しようとする者」は労働者でなくても会員として入会させることが決議され、やがて多くの小工業経営者(kleine Gewerbetreibende)、とりわけ手工業者(ハントヴェルカーHandwerker)が入会したので、会員は同年末には七〇〇人になつたけれども、純然たる労働者の教養協会ではなくなつた。会員は算数・作文・図画・英語・ドイツ語・唱歌・体操の授業に参加し、さらに毎週一回、歴史・自然科学その他の一般的テーマについて講演がおこなわれた。ただし、講演でも討論でも、政治と宗教とに関するものは避けられた。この教養協会は、市評議会そのほか一般市民のあいだに好意をもつて認められ、援助を与えられた。この会は一八四八年の

革命にもほとんど関係せず、なんら特別の影響を革命から受けなかつたにもかかわらず、警察当局は一八五〇年から五四年までその活動を監視していた。けだし、当時の会長W・フリッケ（Fricke）は、革命時代の指導的人物たるコルト・ヴィッシュマン（Cord Wischmann）やパストル・ドューロン（Pastor Dulon）と交際があつたからである。しかし、ドューロンは一時「フォーアヴェルツ」の会員であつたことがあるけれども、会にたいしてはなんらの影響力ももちえなかつた。会は、当局にたいして常に最大の忠誠を持し、とりわけ一八五一年には教師W・フーフェラント（Hufelandt）が会長になつたので、一層そうであつた。一八五四年に、他地域から来たものをすべて幹部から除くようにと警察から要求されたときにも直ちに応じて、十二人の幹部のうち六人をやめさせている。これは、他地域から来たものが不穏分子であり、ドイツにおける他の政治的グループとつながつていると見られたからである。そのため、幹部には一人も労働者がいないことになつた。すなわち、新幹部は、三人の教師、一人の書記（Schreiber）、一人の商店員（Commis）、一人の石切工親方（Steinhauermeister）、一人の弁護士、二人の葉巻工場主（Zigarrenfabrikant）、一人の漂白職親方（Siedemeister）、一人の靴職親方（Schuhmachermeister）、一人の小売商人（Detaillist）から成つている。一八五二年七月には会員一、五〇〇人をかぞえ、ブレーメンにおける一切の政治団体が解散させられ、他の諸邦では労働者教養協会も解散したのに、この会だけは存続することができた。したがつてブレーメンの警察当局はたびたび、市内の諸方面および外部から、この教養協会の目的や傾向について照会を受けている。たとえば一八五二年にハノーヴァー王国警察本部は、指物職人ハルディング（Harding）がハノーヴァーの代議員として同年の創立記念祭（Stiftungsfest）に参加し、「フォーアヴェルツ」が「北西ドイツ労働者連盟」（Nordwestdeutsche Arbeitervereinigung）に加盟することを要請したという報告に接した。そこで同本部はブレーメン警察に、この教養協会がなんらかの民主主義的傾向をもつてはいないかと照会したところ、「フォーアヴェルツ」は決して「革命の子」（Kind der Revolution）ではなく、政治的意図

も宗教的意図ももつてはいない、という回答を受けている。そののちラッサール派が登場する一八六〇年代の中ごろまで、「フォーアヴェルツ」は特に高揚を示すこともなく、平穏無事の軌道を通つていつた。ベットヒャーは「フォーアヴェルツ」の歴史を通観して、この協会は一八六四年にいたるまで、他のドイツの労働者教養協会となんらのつながりももたなかつたと結論している。賃金労働者はこの協会内で一度も決定的影響力をもつたことはなく、かれらはつねに受ける側であり、教養あるブルジョワジーがいつも与える側であつた。それでいて賃金労働者のあいだには、劣等感は生れなかつた。こうした事実と政治的宗教的中立の厳守とが、解散の運命をまぬかれしめたゆえんである——とベットヒャーはいうのである。(註19)

「フォーアヴェルツ」にかんするベットヒャーの記載の事実は、主としてブレーメン警察文書によつているので、ほぼ真相に近いものと見てよかろう。ここでまず注意をひくのは、会長フリッケが革命時代に活躍した人物と交渉をもつていたことである。また、そうした人物が一時的ながら会員として入りこんでいた事実である。しかし、けつきよく当局のきびしい取締りと会員大衆の一般的傾向とは、このような人物に活動の余地を与えなかつた。さらに注意すべき点は、労働者以外のもの、すなわち小工業経営者、とりわけ手工業親方が入会を許されていることであろう。ハントヴェルカーという語の意味については、あとでも述べるが、ここでは手工業職人でなく、親方層を指していることは明瞭であろう。これは、ひとりブレーメンだけの現象でなく、一八四〇年代の末から五〇年代にわたるドイツにおける労働者教養協会の大部分に共通の傾向であつたと考えられる。こうした教養協会の運動を「労働組合活動」の一種と見なすワルンケの見解が支持されえないことは、ここでも明らかである。

つぎに秘密結社「トーテンブント」（死者同盟）について、ベットヒャーの記すところによると——一八四八年の革命の結果として労働者の諸組織が結成され、普通選挙が導入されたことは、国家生活にたいする労働者の活発な政治的関心

へとみちびいた。しかし、この全く健全な発展は、一八五一年の結社・集会禁止によつて、にわかに中絶されたので、その発展は秘密結社の結成に転移することとなり、理性的な政治的見解の形成ではなくして、政治的現実とはかかわりのない革命的希望の夢が追求される。こうした秘密結社の一つが「トーテンブント」である。その設立者であり指導者でもあつたのは、葉巻労働者N・H・コルビー（Kolby）である。一八二八年に生れ、貧しい境遇にそだつたかれは、自分の好学心を手あたりしだいの無計画な読書でみたそうとした。革命ののち、しばらく労働者教養協会「フォーアヴェルツ」に入つていたが、そのとき或る鞍工（Sattler）からベルリンの「トーテンブント」の規約を教えられた。一八四九年「ブレーメン葉巻工組合」（Bremer Zigarrenmacherverein）の新市街地区委員長（Vorsitzender des neustädtischen Bezirkes）をしているとき、その組合長（Präsident）フロベーゼ（Fröböse）と不和になつて脱会した。同じく非政治的団体である「フォルトシュリット」（Fortschritt）にしばらく入会していたのち、一八五〇年に射撃協会（die Schützengilde）に入り、まもなくその幹部に選任された。一八五一年の結社法によつて政治的団体が禁止されたので、急進的な諸グループはしばしば小さな秘密集会として政治的運動を継続した。これらのグループは上記フロベーゼの本部で会合し政論をたたかわしたので、コルビーもこうしたグループの一つと接触するようになつた。このサークルのなかでは、ホーベルマン（Hobelmann）の「フリューリングスボーテン」（Frühlingsboten）に掲載された革命的な諸論説にもとづいて、「つぎの幾月かのうちに或る変革が起ること、したがつて各人をその部署につけ、来たるべき事態にそなえさせることが必要だ」という確信が、しだいに強く形成されてきていた。かれらは、一八四八年・四九年に活躍して国外に亡命したルーゲ（Ruge）やキンケル（Kinkel）がドイツに帰つてくることを期待し、また、近迫せる革命へのキッカケがフランスから起ることを期待して、フランスの動きを見守つていた。そういうわけでかれらは全く政治的情勢判断を誤り、ナポレオンのクーデターをホーベルマンの「夢」の実現開始と見なしたのである。政治を論ずる葉巻工たちのこうした会

談が、コルビーによる「トーテンブント」結成の誘因となつた。この秘密結社は「トロイエ・ブリューダーシャフト」(Treue Brüderschaft) という名称をもつ疾病金庫 (Krankenkasse) を表看板にしていたが、その主たる目的は、「革命勃発のさいに予期される怖るべき事態を予防すること」であつた。一八五二年のはじめにフランスにおこると予想される「赤色派反乱」(Schilderhebung der Roten) にそなえて、この秘密結社のメンバーは、鉄の胸当と短剣とを用意していた。一八五一年十二月のはじめ、この結社はすでに「トーテンブント」という名称を用いるようになつていたが、メンバーは三一名であつた。それは二九名の葉巻労働者 (Zigarrenarbeiter)、一名の錠前工 (Schlosser)、一名の石切工 (Steinhauer) から成つていた。そのうち二一名は三〇才以下であり、最年長者が三一才であつた。一八五二年のはじめ以来もはや「トーテンブント」の総会は開催されず、新入会者はすべて、一人づつコルビーによつて規約にしたがつて受入れられた。しだいに結社員はその数を増して七〇名となり、メンバーはいくつもの分会に編成されていた。(分会名は「フェライン・アム・ブンテントールシュタインヴェーク」Verein am Buntentorsteinweg とか、「ヴィークマイヤーシェ・ゲゼルシャフト」Wiegmeyersche Gesellschaft というように、さまざまである。) これらの分会は一八五二年四月のはじめに設立されたが、いずれも「フォーアヴェルツ」を模範として結成されたという。ただ、精神的陶冶と道徳的に完璧の行状のほかに、演説と討論とによる政治的陶冶ということが付けくわわつていた。しかし遺憾ながら実践においては、こうした全く立派な目的も神秘的儀式の雑物のもとに消えうせていた。(この儀式では、短剣や頭蓋骨やローソクの光というようなものが大きな役割を演じている。ベットヒャーは、これらの儀式がフリーメイソン (Freimaurerei) から示唆を得ているか否かは断定しがたいが、おそらく盗賊小説や恐怖小説から影響されたものであろうと推定している。) 一八五二年三月二十九日にこの結社が解散させられたとき、メンバーの一部は戦闘を開始しようとしたが、コルビーはそれを阻止することができた。この結社の文書掛であつたエミール・マイヤー (Emil Meyer) の計画

も、この解散と連関していた。その計画は、反動の主脳部を地上から抹殺するために、市評議会（Senat）を株式取引所での夜間会議の席で襲撃し、かれらを除去してしまおうというのである。コルビーはこの計画の内情に通じていて、その実行のために適当な人物を結社員のなかから選定することになつていた。しかし一八五二年五月二十三日「トーテンブント」の存在について警察に密告するものがあり、指揮者たちと大部分のメンバーが逮捕された。陪審裁判は同年三月二十九日の法令で廃止されていたので、陪審でない刑事裁判で、主な被告は、違法の陰謀に参加したことと市評議員殺害計画という犯罪を準備したこととのゆえに、刑罰を宣告された。その量刑は、ベットヒャーによると、ブレーメン市におけるこのエピソードの現実的重要性に比例せず、むしろ一般的政治情勢からのみ説明されうるものであつた。すなわち葉巻労働者（Zigarrenarbeiter）コルビーは懲役七年、エミール・マイヤーは六年、金労働者（（Goldarbeiter）F・R・シュッツ（Schütz）は三年半、葉巻匠（Zigarrenmacher）J・D・アルブレヒト（Albrecht）は一年半。その他の被告は一段と軽い刑で済んだ。この裁判記録から明らかになるのは、「トーテンブント」が純然たるブレーメンの出来事だつたことである。秘密結社という思想は元来なんら新しいものではなく、このような結社は当時いくつも存在していた。しかし、ブレーメンの「トーテンブント」で新しい点は、疾病金庫を表看板に選んだことである。規約は主としてベルリンの「トーテンブント」に学んでいる。「あらゆる屈辱を耐え忍べ、死さえ耐え忍べ、しかし断じて裏切者となるな」「Dulde jede Schmach, dulde selbst den Tod, werde aber nie Verräter.）というモットーは、「クーリエ」（Courier）に掲載されている或る物語のなかの騎士の武器にしるされた金言であつた。ヴェーアムートおよびシュティーバーは、その共著「十九世紀の共産主義者の陰謀」（一八五三年刊）のなかで、このブレーメンの「トーテンブント」が共産主義的諸グループと関係をもつていたとしているけれども、そうした関係は決してなかつた。なるほど、この結社の副委員長をしたことのあるヴァインブロック（Weinbrock）は、私有財産の分配を要求していた。しかし、かれは自分の意見を

この結社のなかで貫徹することは一度もできなかつた。また、メンバーの大多数はその政治的意見からいえば急進民主主義的であつたが、ブレーメンにおける他の民主的諸団体の指導的な諸グループとのあいだにも、つながりはなかつた。――とベットヒャーはいう。(註20)

「トーテンブント」についての上記ベットヒャーの記述は、裁判記録その他の史料にもとづいているが、諸所に見られるベットヒャー自身の判断は、なお検討の余地があるように思われる。ここでわれわれにとつて重要な点は「トーテンブント」が疾病金庫を表看板にしていたことであるが、しかし、ベットヒャーの記述からうかがいうるかぎりでは、「トーテンブント」はワルンケのいわゆる労働組合組織として労働組合活動をおこなつたとはいえない。その主たる目的は「革命勃発のさいに予期される恐るべき事態を予防すること」であつて、疾病金庫は全くの表看板にすぎなかつた。そこでは労働条件の向上というようなことは謳われてもいないし、実際の活動目標ともなつていなかつたようである。それは政治団体であつて、労働組合組織ではなかつた、と見るべきであろう。

「トーテンブント」のほかに、ブレーメンには当時なお二つの政治的な労働者秘密結社があつた。ベットヒャーによると――一八五二年のはじめ、「指物職人の夜の集会」という名のもとに、一つの秘密クラブが結成された。これは革命諸年の急進民主主義の伝統をつぐものであつたが、やがてその集会は警察に知られ、一八五三年三月二十六日に幹部が逮捕された。しかし、この団体にはほとんどブレーメン以外から来た手工業者（ハントヴェルカーHandwerker）だけが所属していたので、当局は該当者をブレーメンから追放するにとどめた。いま一つの政治的な秘密組織は、「新友好会」という名称のもとに集まつた菓子工（Zuckerbäcker）や葉巻労働者や手工業者たちの民主主義団体であつた。ここでも討論では革命時代の民主主義的見解が主張された。この結社は、一八五二年十二月六日に設立されて翌五三年三月十八日まで、三カ月あまり存続したにすぎない。これは告発によつて発見され、関係者は逮捕された。ここでもメンバーはほとん

どブレーメン以外から来た労働者から成つていたので、該当者はブレーメンから追放されるにとどまつた――とベットヒャーは述べている。(註21)

「手工業者」（ハントヴェルカー）という言葉が上記のベットヒャーの報告に出ているが、この言葉は、ゴルトシュミットの「営業自由の勝利にいたるドイツ・ハントヴェルカー運動」（一九一六年刊）においても、手工業に従事する職人・徒弟のみならず親方をも含めた総称として用いられている。これは、ゴルトシュミット自身の用語法であるばかりでなく、かれが引用している一八五五年の文書にも、「親方（マイスター）という名をもつ無数のハントヴェルカーが、現在すでに実際には職人（ゲゼレ）として、もつと大きな親方あるいは商店のために働いている」（……andererseits sind schon jetzt zahllose Handwerker, did den Meisternamen führen, in Wahrheit als Gesellen für grössere Meister oder für Magazine tätig.）と見えていて、当時の通念でもあつた。(註22) したがつて、ここで「手工業職人」（ハントヴェルクスゲゼレ）といわないで「ハントヴェルカー」と書いているのは、そのうちに親方層を含む可能性もある。しかし、かれらはほとんど皆ブレーメン以外から来たとあるから、このばあいはおそらく遍歴職人であろう。それにしても、最後に述べられた二つの秘密結社もまた、その内容から見て、ベットヒャーのいうように、たしかに「政治的な労働者結社」であつて、労働組合組織とはいえないように思われる。

ベットヒャーは一八四八年の革命から一八五〇年代にわたる労働運動を概観して、この運動の担い手が工場労働者という第四階級ではなく、労働者層（Arbeiterschaft）の核心は手工業者層（Handwerkerstand）であつた、と強調している。またベットヒャーは、マルクシズムの革命的思想はわずかの帰依者しかもたず、大衆は自分たちが一つの強い統一的な勢力を構成しているという自覚を完全に欠いでいた、という。(註23) この解釈はゆきすぎのきらいもあるが、ドイツにおける最も尖鋭な革命運動の中心地の一つとされるブレーメンにおいて、ワルンケのいうような「労働組合組織」の「拡大」

現象が見られないことだけは確かである。

六

一八六〇年代に入つてベルリンとともにドイツ労働運動の中心地となつたのはザクセンのライプチッヒであり、そのザクセンで特に指導的役割を演じたのは、周知のごとくロクロ工アウグスト・ベーベルであつた。かれの自叙伝「わたしの生涯から」（一九一〇年初版）は、一八五〇年代の末から一八六〇年代のはじめにいたる状況をつぎのように述べている。――プロイセン王フリードリッヒ・ヴィルヘルム四世の弟ヴィルヘルムが摂政となつたこととイタリア戦争が、すでに民衆を強く揺り起していた。一八四九年このかた民衆にのしかかつていた反動の諸年の圧力はやわらいでいた。ドイツの経済的発展は、なるほど当時いちじるしい進歩をとげていたが、しかし依然としてドイツは、まだそのころは主として小市民的、小農民的な国であつた。工業労働者（die gewerblichen Arbeiter）の四分の三以上は、手工業に属していた。本来の重工業、すなわち鉱山業・鉄工業および機械製造工業における労働を除くと、工場労働は、手工業的に働いている職人たちから軽侮の念をもつて見られていた。工場製品は安価だが悪いものと思われていた。手工業職人たちには、工場労割者は値うちの低いものと見なされていたので、ゲゼレ（職人 Geselle）とかゲヒルフェ（職人・徒弟 Gehilfe）とかでなくアルバイター（労働者）と呼ばれることを一種の人格的軽視（eine persönliche Herabsetzung）と感ずるものが多かつた。そのうえ、これらの職人や徒弟の大多数はまだ、いつかは自分たちも親方になれるという確信をいだいていた。とりわけ一八六〇年代のはじめには、ザクセンその他の諸邦にも営業自由の原則が導入されたので、いつそうこの信念が強かつた。これらの労働者の政治的教養は非常に乏しかつた。かれらは一八五〇年代すなわち最も暗い反動の諸年に生長し、この諸年には一切の政治的な生活が生気を失なつていたので、かれらは政治的に活動するいかなる機会ももつて

いなかつた。(In den fünfziger Jahren, das heisst in den Jahren der schwärzesten Reaktion gross geworden, in denen alles politische Leben erstorben war, hatten sie keine Gelegenheit gehabt, sich politisch zu betätigen.) 労働者団体 (Arbeiterverein) あるいは手工業者協会 (Handwerkerverein) ——後者の呼び方のほうが多かつた——は例外的にしか存在せず、しかもそれらは他のあらゆることには役立つても、政治的啓蒙にだけは絶対に役立たなかつた。政治的性質の労働者団体は、大部分のドイツ諸邦では決して許されなかつた。それどころか、そうした団体は一八五六年のドイツ連邦議会の決議にもとづいて禁止されていた。なぜなら、フランクフルト・アム・マインの連邦議会の見解によると、労働者団体は社会主義と共産主義との拡大と同義的なものだつたからである。しかし、社会主義と共産主義は、当時のわれわれ若者には、全く未知の概念であり、いわゆるボヘミアの村々だつた。なるほど、ここかしこに、たとえばライプチッヒには、フリッチェ (Fritzsche)、ファールタイヒ (Vahlteich)、シュナイダー(Schneider)、シリング(Schilling) というような、ヴァイトリング的共産主義に属してヴァイトリング(Weitling) の著書を読んでいた孤立的人物もいた。しかし、それは例外だつた。たとえば共産党宣言を知つていて、革命時代のライン州におけるマルクスおよびエンゲルスの活動について何か知つている労働者があるなどということを、わたしは当時ライプチッヒで全く耳にしたことがない。以上のすべてから判明することは、そのころ労働者層は、階級的関心をもたぬような、また社会問題の存在を知りもせぬような立場に立つていたということだ。だからこそ、自由主義的な代弁者たちが設立を援助した諸協会、そして労働者たちには民衆の味方という立場の典型とも思われた諸協会に、かれら労働者は群をなして参加したのである。こうして一八六〇年代のはじめにこれらの労働者協会は、夏の暖い雨のあとのキノコのように発生した。とりわけザクセンではそうだつたが、ほかのドイツでも同じような有様であつた。あちこちにこうした協会が生まれたが、それらの協会で社会主義運動がいくらかの地盤を見いだすまでには、なおこれからのち多くの年月が経過し、

そのあいだに以前の労働者協会は消滅するというような状況であつた。そのころライプチヒでは政治的生活が非常に活発だつた。同市は自由主義とデモクラシーの主要地点の一つとして通つていた。或る日わたし（ベーベル）は、かねて予約購読していた民主主義的新聞「ミッテルドイッチェ・フォルクスツァイトゥング」(Mitteldeutsche Volkszeitung) で、教養協会 (Bildungsverein) 設立のための民衆集会への案内を読んだ。この新聞は婦人の権利の主張者として有名な故ルイーゼ・オットーペーター (Luise Otto-Peter) の夫君であるペータース (Peters) 博士の編集するものであつた。この集会は一八六一年二月十九日に開かれ、わたしが行つたときには、もう会場は満員だつた。やつとのことで、わたしは廊下に入りこんだ。報告の任を引受けた「ポリュテヒニッシェ・ゲゼルシャフト」(工芸会 Polytechnische Gesellschaft) の会長ヒルツェル (Hirzel) 教授は、労働者団体が一八五六年の連邦議会決議にもとづいてザクセンでは許されないから、「ポリュテヒニッシェ・ゲゼルシャフト」の第二部として、「工業教養協会」というもの (ein Gewerblicher Bildungsverein) を設立したい旨を述べた。フランクフルト・アム・マインのドイツ議会の議員をしたこともあり、首相フォン・ボイストから譴責されて教授の地位を逐われたこともあるロスメスラー (Rossmässler) のほかに、ファールタイヒやフリッチェその他のひとびとも発言し、かれらはいずれも、この協会が政治的なものでなければならぬとして、その完全なる独立性を要求した。授業の目的を追求することは学校がすればよい仕事で、成人のための協会のなすべきことではない、というのだつた。わたしはこれらの弁士の主張に賛成ではなかつたが、しかし労働者というものが学問のあるひとたちにこれほど力づよく迫るものをもつということに感銘し、またひそかに、自分もあのように演説できればよいと思つた。この協会は設立され、反対派のひとたちも目的は達しなかつたが入会した。わたしもその晩に会員となつた。――とベーベルは書いている。(註24)

このベーベルの回想を読んで感じられることは、一八五〇年代の反動期がドイツ労働運動の発展に与えた傷の深さであ

る。「一八四九年このかた民衆にのしかかつていた反動の諸年の圧力」は、異常に大きなものであつた。一八五〇年代は「最も暗い反動の諸年」であつた。そのうえ工業労働者の大部分は手工業に属し、こうした手工業労働者は、かれらの手工業製品よりも安価に大量につくりだされる工場製品を粗悪品として軽蔑し、したがつてそのような製品をつくる工場の労働者を軽蔑していた。かれらはまだ親方となる自信をもち、ベーベル自らもそのような確信をもつてロクロ職人として遍歴の旅をつづけ、ゆくりなくもザクセンに入つてきたのであつた。一八五〇年代は「一切の政治的生活が生気を失なつていた」時期であり、労働者が「政治的に活動するいかなる機会ももつていなかつた」時期である、とベーベルはいう。この反動期は、やはりドイツ労働運動史に一つの大きな断層をつくりだしたと見るべきではなかろうか。一八四八——四九年の革命の指導者は、あるいは国外にのがれ、あるいは弾圧されて生気をうしない、かくして労働者大衆はほとんど政治的素養をもたず、社会主義や共産主義について知るところも皆無にひとしく、まして共産党宣言や革命時代のマルクスやエンゲルスの活動については全く無知であつた、というのが真相であろう。ワルンケが労働組合組織の一種として重視する労働者教養協会も、この反動時代に存続しえたものは少数で、大部分は解散を命ぜられたことは、ブレーメンのばあいにベットヒャーが述べているとおりである。その存続しえたものは、当局が無害と確認したもののみであり、そこには革命時代の精神はほとんど継承されていないと見るべきではなかろうか。

七

ギルドの自壊が早くおこなわれたイギリスのばあいには、古い職人組合と近代的な労働組合とは、その発展において連続性をもたないという主張が成立しよう。このことは、ウェッブ夫妻の指摘いらい、ほとんど定説となつているようにも思われる。しかし、十九世紀中葉までギルド（ツンフト）遺制が存在したドイツでは、事情がちがう。ドイツにおける近

代的な労働組合と職人組合との関係については、これまで二つの相反する見解が存在していた。一つは、労働組合の発展が職人組合の存続によつて大いに助長されたとする見解であり、いま一つは、職人組合の存続が労働組合の発展におよぼしたプラスの影響を全く否定し去るわけではないけれども、むしろマイナスの面が大きいとする解釈である。この問題についてわたくしは、さきに「一八六〇年代のドイツ労働組合とツンフト遺制」と題する小論で、一八六〇年代におけるドイツの近代的労働組合のめざましい発展は、もちろんドイツ産業の発展という基本的条件の成立によつてはじめて可能となつたものではあるが、ツンフト遺制としての職人組合、わけても金庫制の存続によつて少なからず助長されたとする見解を主張した。(註25)

ワルンケの解釈は、ツンフト遺制的な諸組織がドイツ労働運動史上に占める意義を高く評価する点において、わたくしと一致するけれども、しかし古い組織と近代的な労働組合との本質的差異を認めず、両者を全く同一視する点において、わたくしの見解と異なる。このようなワルンケの行きすぎにたいしては、さきの小論でわたくしの引用したネストリープケの主張やペープローその他のひとびとの記載している事実を、いまひとたび、くりかえさざるをえない。ネストリープケは「労働組合運動」(一九二二年刊)で、職人運動の余波と残渣とによつて近代的労働組合が受けた促進的影響は決して大きいものではなく、とりわけ最も熱心なツンフト職人がしばしば近代的労働運動への最もはげしい反対者であつた事実に注意を喚起している。(註26) またペープローの「ドイツ左官の諸組合(一八六九——一八九九年)」(一九〇〇年刊)によると、一八七二年においてさえ、組合金庫の近代化のために流血の闘争を経ねばならなかつた。すなわちラッサール派の全ドイツ労働者同盟(ドイツ労働総同盟)に属するベルリンの左官職人は、旧来の組合金庫を改組し、これをツンフトの枠からはずして自分たち職人の手にとりあげようとし、それに反対するツンフト員(Zunftgenosse)、すなわち「ツンフト的な考えをもつた左官たち」はひそかに棍棒をたずさえて総会に出席し、両派の乱闘となつた。これに類する争い

は、たとえ流血をみなかつたとはいえ、北ドイツの大部分の都市で、とりわけメクレンブルク、シュレースウィヒ・ホルシュタイン地方やハンブルク、リューネブルクなどの都市でおこなわれた、という。[註27] ワルンケのように旧来のツンフトの枠のなかにある職人組合や金庫制を近代的な労働組合と同一視えないゆえんである。こうしたツンフト遺制的組織を改革しようとする声が高まつてくるのは一八六〇年代に入つてからであつて、たとえばザクセンのドレスデンにおける陶工金庫は、それまで親方たちによつて管理されていた。陶工職人たちが自分らだけで管理しようと要求したのは一八六七年である。[註28] 大工のばあいにも、一八六八年八月にようやく近代的労働組合としてベルリン大工組合が結成される。その理由として、「旧来の大工職人の組合すなわちツンフトは、もはやこのひとびとの利益を精神的物質的に満足させるに足りないから」（傍点小林）と述べられていることに注意すべきである。[註29] さらにワルター・フリッシュの研究によると、ベルリンでは一八五〇年代に帽子工職人組合（Hutmachergesellenschaft）があつて、一つの死亡・疾病・共済金庫（eine Sterbe-, Kranken- und Unterstützungskasse）をもつていた。遍歴する職人は親方金庫（Meisterkasse）から三½ジルバーグロシェンと、職人金庫（Gesellenkasse）から同じく三½ジルバーグロシェンを祝儀（Geschenk）として受けたという。[註30] このように一八五〇年代の職人組合は、まだツンフト的に親方との密接な協力関係にあつたのである。遍歴する職人への祝儀が、親方金庫と職人金庫から同額ずつ支払われている。しかるに近代的労働運動の理念にもとづく労働組合においては、このような親方との協力関係は原理的に否定されるであろう。ここに職人組合と労働組合との本質的差異は、きわめて明らかに示されている。したがつてワルンケのように、職人組合の諸組織をも近代的労働組合の活動と同一視することは許されない。

それでは、ワルンケが拠りどころとしているトット女史の研究はいかなる観点に立つているか。われわれは、従来ドイツ労働運動史において最も調査の届かなかつた一八五〇年代に詳細な実証的研究のメスをあてた同女史の画期的労作「一

八五〇——一八五九年のドイツにおける労働組合活動」（一九五〇年刊）の主張するところを検討しなければならぬ。

註 16 Archivalische Forschungen zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung. Bd. I : 3. Arbeitstagung der Forschungsgemeinschaft „Dokumente und Materialien zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung" am 7. und 8. Dezember 1953 in Halle (Saale). Berlin 1954. (Wildenhayn, Kurt : Quellen zur Geschichte der Arbeiterbewegung in Erfurt. S. 212.)

(17) Böttcher, Ulrich : Anfänge und Entwicklung der Arbeiterbewegung in Bremen von der Revolution 1848 bis zur Aufhebung des Sozialistengesetzes 1890. (Veröffentlichungen aus dem Staatsarchiv der Freien Hansestadt Bremen, Heft 22) S. 53.

(18) Ibid., S. 29.

(19) Ibid., SS. 29—32.

(20) Ibid., SS. 47—49.

(21) Ibid., S. 49f.

(22) Goldschmidt, Ernst Friedrich : Die deutsche Handwerkerbewegung bis zum Sieg der Gewerbefreiheit. München 1916. S. 72. Cf. S. 80.

(23) Böttcher, S. 50.

(24) Bebel, August : Aus meinem Leben. (Dietz Verlag, 1953) Teil I. SS. 56, 59—61.

(25) 史潮、五九および六二輯。

(26) Nestriepke, S. : Die Gewerkschaftsbewegung. Bd. I, S. 154f.

(27) Paeplow, F. : Die Organisationen der Maurer Deurschlands von 1869 bis 1899. S. 30

(28) Drunsel, A. : Die Geschichte der deutschen Töpferbewegung (1911), S. 39f.

(29) Bernstein, Ed. : Die Geschichte der Berliner Arbeiter-Bewegung, Teil I (1907), S. 171 f.

(30) Frisch, W. : Der Unterstützungsverein für alle in der Hut- und Filzwarenindustrie beschäftigten Arbeiter und Arbeiterinnen (Schmoller's Jahrbuch, 26. Jahrg., 1902), SS. 269-271.

(31) ハンス・ウスクルがその「近世経済史」（一九五五年刊）で、一八五〇年代のドイツ労働運動についてつぎのように述べているのは、同じ東ドイツの著者であるフルンケよりはいそう妥当な見解といえよう。——「反動は独自的労働者運動への萌芽を壊滅させた。もっとも、この運動はまだ依然として職人運動と密接に連関していたのであるが。そういうわけで五〇年代には、ただ控え目な労働者団体 (bescheidene Arbeitervereinigungen) が形成されたにすぎない。一方では、のちのキリスト教的労働組合の胚種細胞たる、アードルフ・コルピング神父（一八一三——一八六五）のカトリック職人組合 (die katholischen Gesellenvereine) 他方では、

部分的に自由主義的ブルジョワジーの指導下にあつた労働者教養協会°」Hausherr, Hans : Wirtschaftsgeschichte der Neuzeit. (Weimar) S. 400.

(32) Todt, Elisabeth : Die gewerkschaftliche Betätigung in Deutschland von 1850 bis 1859. Berlin 1950.

Das Problem der "stillen Zeit" der deutschen Arbeiterbewegung in den fünfziger Jahren des 19. Jahrhunderts (Ⅱ).

E. Kobayashi

Nach dem Berichte Wildenhayns ist es klar, dass auf die Ereignisse von 1848 auch in Erfurt über ein Jahrzehnt der Reaktion folgte, in welchem "alle oppositionellen Regungen unterdrückt wurden". Von Arbeitervereinigungen blieben nur die Handwerks-Gesellen-Kranken kassen erhalten. Auch nach den Untersuchungen Böttchers können wir nicht in der als revolutionäre Zentrale bekannte Stadt Bremen eine Ausdehnung der,, gewerkschafflichen Organisationen" (Warnke) wahrnehmen. Im allgemeinen wirkten die Gesellenschaften in den fünfziger Jahren noch zünftlerisch gewissermassen mit den Meistern zusammen. Zum Beispiel im Falle der Hutmachergesellenschaften von Berlin wurde dieselbe Summe als "Geschenk" aus der Meister und Gesellenkasse gezahlt. So muss man die Gesellnschaft von der modernen Gewerkschaft unterscheiden. Nun wollen wir das epoche machende Werk von E. Todt beurteilen, auf welchem Warnke seine behauptungen gründet. (Kontinuiert)